

A S S B

(オルタナティブ・システムズ・スタディ・ブレティン)

第5号 (1993年6月17日発行)

目次

- | | |
|---------------------------------|------|
| 1. 経済情勢雑感 | 千田智之 |
| 2. 精神医学の現場から
BORDER/LINE (7) | 平野 啓 |
| 3. 政治的煽動と商品による動員 | 国崎 俊 |
| 4. 協同組合資本論 | 安藤一夫 |
| 5. モンドラゴン協同組合群紹介 | 安藤一夫 |

編集人 安藤一夫

発行所 A S S B編集委員会
京都市中京区新樫木町通り竹屋町上る西草堂町178 京都ガイア研究所内
tel. 075-212-2430 fax. 075-212-2655

会費 正会員 : 年間1口 10万円
賛助会員 : 年間1口 3万円
購読会員 : 年間1口 1万5千円

会費振込先 (郵便振替)

(口座番号) 京都9-67283 (口座名) 資本論研究会

千田 智之

- A : 経済オタクとしては、何か浮かない顔だね。不景気もこれだけ続くとうんざりもするが。
- B : いや、どうも適確な意見がいつまでたっても出て来ないという意味では、景気の議論にはあきあきしないでもないが、ちょっと違う。ゾウとネズミの話聞いたことがあるかい。少し前に結構評判になった『ゾウの時間ネズミの時間』（中公新書）に出ていたことだ。
- A : 相変わらずの「新書文化人」だな。結構最近は、一流の新書が若手の学者の登竜門になっているね。それにしても、伊東光晴先生の『シュンペーター』（根井雅弘と共著、岩波新書）は期待はずれだった。もう少し、アップ・トゥ・デイトに書けないものかね。
- B : 期待はずれは同感だが、話をそらすなよ。つまり、ゾウもネズミも体の大きさが違うが、一生は変わらない、と言うことが言いたい。肺呼吸の哺乳類では、生涯に20億回心臓が動いて、心臓の鼓動4回について、1回呼吸するから、ゾウもネズミも5億回息をしたら、それで一生がおしまいだとさ。体の大きさが違うと生涯の長さが違うんだけど、それぞれの一生の時間は別の見方をすれば、同じだってことだ。
- A : ジャ、何かい。進化論はどうなるんだ。それに、体が大きくなると余計に食わなくてはならないだろう。つまり、エネルギーもそれだけ多く消費することになるよ。生涯が何か別の基準では同じでも、それだけでがっかりすることはあるまい。体がどんどんかかなくても、鼓動や呼吸数が一定だとすると、君の得意の「限界効用逓減の法則」に反するのじゃないか。
- B : 進化論で言うなら、最近、グールドはとんでもない意見を発表しているよ。われわれは、進化の極点にいるのではなく、どうやら「進化の袋小路」に入っているのではないかと、言っている。これも、おもしろいが、少し寂しい話だね。ところで、「限界効用」で言えば、ゾウとネズミの本では、もっと興味のある意見が出ている。
- A : いや、もともと「限界」という言葉自体が納得の行かないところがある。経済学を知らないからね。
- B : それは後で説明しよう。歌う生物学者で有名な本川達雄は、その本でね、「島の規則」と言うのを紹介している。それともう一つは、生物が体を動かすのに、大きさによって粘性力と慣性力を使い分けているという説だ。島の規則と言うのは、捕食者の少ない平和な島を想像すると、たとえば、ネズミは猫くらいの大きさになり、ゾウは子牛くらいになるというものだ。そうすると、動物は食べられないように身を守るために、やたら大きくなったり、逆に小さくなったのだろうと推理される。だから、日本でも島としては大きい方だが、極端にでかい動物がいない。本川さんは、とんでもない大天才は島国では生まれにくいのではないかと、逆にネズミという訳ではないが、庶民のスケールは大きくなり、知的レベルはきわめて高くなるのではないかと、この仮説を拡大しているが、当たっているかも知れないね。
- A : 状況によるわな。その程度の仮説で何でも拡大解釈できると思うのは大いなる錯覚じゃないの

かね。

- B : ウン、確かにそうだ。動物の大小が説明できても、それじゃ何故もっと大きい動物がいないのかの説明にはならないし、あるものは小さくなるのを選択するのはなぜかわからないからね。もう少し、我慢して聞いてほしいのは、粘性力と慣性力なんだが、体長1ミリ以下の単細胞生物は、水の粘性抵抗を利用して動いている。小さい生物にとっては、水のようにサラサラしているものでも、ベタベタと粘りついてくるように感じられるものらしい。大きい生物の体を動かすメカニズムと原理は、慣性力の力学的利用に基づいていると言うことだ。これは、使える理屈なんだ。どう言うことかと言うと、小さい会社ってのは、まさしく粘性力の世界にいることになる。大きくなること、つまり成長するためには、まったく別のメカニズム、それは会社を動かすためのものだが、そんなメカニズムを他に用意しなくてはならない。また、大きくなると同じ環境でも違って感じられる。生物でも生きていくために体を動かすのだが、それは大変なエネルギーが必要なことだ。
- A : 確かに、小さい商売は、何か粘着力に囲まれているように感じられるよ。客と店の関係でもそうだよな。馴染みの店を素通りするのは何か悪いような気がしてくるもんね。だけど、大きくなって同じように、お家騒動とか、「大政奉還」なんて言ってるんじゃないか。それなんかも、その粘性抵抗みたいなものだよ。
- B : 一時、「企業進化論」なんて言うのが流行ったんだが、ぼくが言いたいのは、ちょっと違う。イノベーションがまた流行りだが、これにも本当は「断絶」という意味がある。革新とか新機軸と言うと、現在の延長線上に何か新しいことを生み出すように、ソフトに聞こえるけれど、そんなことではイノベーションにならないんだ。粘性力から慣性力の世界にはいるのは、本当に「断絶」に近い。それと、「島の規則」にもからむが、企業が大きくなろうとするのは、やはりそれを守ろうとするのが第一じゃないか。捕食者がいるかどうかは別としても、大きい方が安泰ということはある。それも比較の問題で、平和な島ならみんなそこそこの大きさで良い訳で、極端にでかくなる必要がない。ガリバーが生まれると困るし、そいつも生きて行くには小さい島から出て行くことになる。
- A : いや、封建時代の日本の「鎖国」はどうだ。言わば、平和な島国だろう。そこに、三井や鴻池なんて、とんでもない財閥が出て来ていたじゃないか。大名や幕府だって、借金していたんじゃないか。
- B : 三井や鴻池と言ったって、高利貸資本さ。幕府が中央銀行を作っていれば、解決したんだよ。それに、鎖国てのは誤解だ。アナール派の御大のブローデルでも、徳川時代の日本は金銀銅の国際的な供給国だったと認めている。実際に、新井白石は、それらの流出をくい止めようと政策提言していたくらいだ。これについては、神戸大学の野口武彦がおもしろい本を書いているよ。
- A : おいおい、野口さんと言えば文学者だろう。そんなことにまで、興味を持つのかい。
- B : 先の本川さんだって、生物学の話の中に、経済学的な言い回しをふんだんに取り入れているさ。経営とか経済を譬えに使うのは、この頃ではかえって分かり易いことになっている。だから、

実際の会社勤めや企業経営を知らない政治家や官僚の話はおもしろくないんだ。普通の人々に受けるのは、そういう譬えだ。その点、アメリカの学者はみんな言い回しがうまいよ。

A: また、ガルブレイスのことかい。そうじゃなくて、野口さんの話だろ。

B: その本は筑摩書房からつい最近出たが、『日本思想史入門』と言うんだ。題名程おどろおどろしいもんじゃないがね。そこに、「貨幣の生態系」というのがあって、新井白石が古典的な重金主義者とすれば、白石のライバルだった荻生徂徠が「信用貨幣」論だったなんてことが取り上げられている。それよりも、ぼくが驚いたのは、野口さんが『宇津保物語』を読んで、マルクスの「価値形態論」を連想したり、スミスやリカードを読んでもよく解らなかつた「地代論」が、マルクスの『剰余価値学説史』で氷解した、なんて書いていることだ。もっとも、折角『宇津保物語』や『徒然草』を取り上げて、「貨幣生態論」に挑戦したのだから、『徒然草』に出て来る「貨幣物神」観にも言及してほしかった。読み落としてしまったのかも。

A: フーン、やっぱり経済学なのかね。それもどうせ流行りじゃないのか。

B: いや、今や経済学は全然無力だろう。小室直樹なんて言うのは、橋爪大三郎に言わせると「天才」らしいが、この前には、サムエルソンの経済学ですべてが解明できるなんてヨタ話を書いたかと思うと、鈴木淑夫や吉富勝などの官庁エコノミストをコテンパンにやっつける本を出しているよ。そりゃあ、溜飲は下がるだろう。鈴木さんは、日銀の理事から野村総研に天下り、吉富さんは、経済企画庁の局長から長銀総研へ天下ったエリートだ。しかも、ふたりとも言わば、バブルの前と後の「戦犯」なんだから。

A: どういうことかね。小室さんのは、ひがみじゃないかな。京大と東大は出たけれど、冷や飯を食われたんだから、エリート憎しの気持ちがたいてい出てもおかしくないな。

B: 頭が良すぎるのに、しかもテンションが高いという説もあるよ。ところで、鈴木さんは、今月岩波新書で『日本の金融政策』と言うのを発表している。いや、読まなくてもいいけど、バブルの責任についてはお茶を濁しているよ。日銀は公式に責任を認める報告を以前に発表しているけれど、この人は、一昨年だったかに朝日の『アエラ』のインタビューで、日銀が87年のブラック・マンデーの後も異常に長く低金利政策を執ったのは、大蔵省の圧力もあったらしいが、日銀プロパーの総裁候補三重野康を守るためだったと漏らしていたんだ。総裁人事で金利政策が決められたんだなんて、この国の人々とはとんでもない目に合わされたとか言いようがない。

A: 日銀も経済企画庁もよくわからない役所だよ。経済企画庁なんてのは、結局大蔵省の下請けじゃないか。「景気回復宣言」をしたいけれど、通産省が認めないんだから、長官の「個人的見解」を発表するって新聞に出ていたが、どういうことだ。

B: 確かにそうだ。政策官庁だと言われているが、実際には法案策定なんてしたことがない。まあ、言わば「分析屋」なんだろう。調査とか統計は総務庁の主管だからね。そこで、吉富さんてのは、「いざなぎ景気」を越えるだとか、この不況は「循環的」なものだから在庫調整が一巡すれば、回復は早いと言い続けていた。もっと、ひどいのはなかなか不景気を認めなかつたことだろう。「減速しつつ拡大している」なんて作文をしていたのだから、エコノミストと言われるのは、恥ずかしいと思っているんじゃないか。この人と筑波大学の宮尾尊弘が論争したこと

があるが、傑作だったのは、シュンペーター流のイノベーションが今や必要で、過剰なケインズ政策をすると民間が政府に頼り過ぎて国が減ぶ、なんて言っていたんだ。冗談じゃないよ。政府が管理するイノベーションなんかあつてたまるかい。

A: 言うじゃないか。何か、君まで小室さんになつちやつたんじゃないか。

B: 申し訳ない。しかし、経済企画庁とはそれ程不思議な官庁なんだよ。各省庁の寄り合い世帯だけれど、当然大蔵省が主導権を握っている。経済理論で見ると、新古典派とケインズ主義者の野合した「化け物」みたいなところがある。時々、役人のくせに政府政策に公然と批判をしている原田泰という郵政省の研究所の部長がいる。この人はもともと経済企画庁で『経済白書』を書いていたエリートなんだが、自分でマーシャル主義者だと称しているよ。2年前に『土地・住宅の経済学』（井上裕行と共著、日本評論社）という本を出しているが、びっくりしたのは、政府の土地政策や税制を理路整然と批判していた。無理な地価抑制などしないで、市場にまかせの方が良いとまで言っていた。高級官僚がこんなことで大丈夫かな、と思ったもんだ。まかせておいて安心な「市場」なんてどこにあるんだ。結局、経済企画庁からはずされちやつたんだろうな。

A: 土地の話はやめておこう。下がったなんていうのも腹が立つし、下がっても買えないんじゃない方がない。なんでもかんでもバブルのせいにするのも、もう聞き飽きたよ。どうなるんだよ、一体。

B: ぼくも土地の話はしたくない。だけど、どうなるかと言うより、実はどうしたいのかわかんないよ。どうしたらいいのかわからないもんだから、とりあえず、昔の人が言ったことを考え直してみようか、と言う風潮もないことはない。

A: だから、シュンペーターなのかい。そんな名前ならさすがにぼくでも聞いたことがあるから、伊東さんの本を読んで見たんだよ。恐ろしく古い人のように思っていたが、そうでもないんだな。若い時のシュンペーターがウィーンのカフェで、晩年のマックス・ウェーバーと出会ったくだりはおもしろかった。

B: いや、20世紀の人さ。温故知新でもないんだらうが、確かに、昔の人を見直そうとするのは一理あるんだ。と言うのも、さっきも言おうと思ったんだけど、いろんな議論がごっちゃになってるだろう。それに、エコノミストと事業家と政治家や官僚とでは、役割も責任も違うよ。予測が外れたからと言って責め立てても仕方なからう。

A: そういう意味では、君も整理が必要ではないか。生物学のアナロジーを持ち出しても解決にはならんだろう。

B: いや、そうとは限らない。マルクスだって、『資本論』をダーウィンに捧げたいと本人に手紙を書いたらしいし、マーシャルは、自分の経済学理論を「森や木」にたとえている。ケインズがニュートンの評伝を書いたのも、別に余技じゃない。最近では、東大の岩井克人は、深層心理学にこつていると自分で言っているんだ。

A: わかったわかった。しかし、マルクスから手紙を貰ったとしたらダーウィンもびっくりしたろうね。

B: だから、生物学というのは結構無視できないと思う。われわれも所詮は生物だからというだけじゃなくて、環境とか適応、それからやはり進化という問題がある。社会科学というか、経済学プロパーではたとえば環境問題は解決できないような気がするから。と言うより、今の経済システムのままでは永遠に解決できないんだから、そのシステムを研究する学問では無理なことは承知せざるを得ない。でも、そうだとすることを先ず証明しなくては、他の道を探ろうとはしないだろうし、現実に行き詰まってからでは遅いんじゃないか。つまり、仮説やシュミレーションの方が現実より早いんじゃないかと思う。

A: そうかな。間に合わないんじゃないか。君の話では、経済学の不可能性を証明することになるんじゃないか。それに、現実の変化の方が圧倒的に早いよ。ソ連やポーランドなどの動きを見ろよ。だいたい、日本が不況だからと言って文句たらたらなのはおかしいんだ。そんなことで、ユーゴやモザンビークの酷い現実と比べたら、不満が出るのがおかしいよ。君の言う経済学に力が僅かでもあるんだしたら、こんな状況にどんな処方箋を書けるのかね。いわゆる先進国はいろんな意味で成功も、失敗もして来た訳だ。だったら、何とかするべきではないのか。

B: ちょっと、待ってよ。経済学は万能じゃないんだ。いやしくも科学を名乗っているのは、これは仮説の集合の域を出ないんだ。仮説を立てて、それが現実をうまく説明できるか、また、過去の経験と整合するかを検証するのが学問と言うものだ。だから、逆に言えば、ぼくは、政府の審議会なんぞに学者がノコノコ出て行くのは反対だ。政策提言も政策批判も厳しくやらねば意味がない。有効性の薄い政策に加担するのはとんでもない話だし、ましてや官僚が作文した報告書に「連帯保証」するなんて駄目だ。

A: そうだよな。「政府御用」が印籠の葵のご紋だったら、もう自由主義とか資本主義はやめた方がいい。おかしな国だよ、まったく。いっそのこと、日本は「社会主義」を名乗ったらどうだ、と言いたい。

B: いや、本当にそうなるかも知れない。シュンペーターの予言じゃないが、ガルブレイスも一時似たようなことを『経済学と公共目的』で言っている。20年も前のことだがね。それより気になるのは、ケインズの予言では、投資が不断に完全雇用水準を保つように維持されれば、それはやがて資本設備に対する一切の有用な需要を飽和させ、利子率を消滅させる点まで切り下げることが必要となるであろう、なんて断言しているんだ。つまり、彼は、経済はコントロール可能だし、資本が希少ななんて言わせないように出来ると考えていたらしい。そこまで行くと、まさに社会主義だよ。

A: 金利がゼロになるのかね。じゃあ、誰も貯金をしないし、借りただけタダで借りれるのならお金とは一体何になるんだろう。バカバカしい空想じゃないか。

B: もち論、これも仮説さ。仮説ということは、寓話と変わらないんだよ。経済学の本を読んでいて、素直になれないのは、だいたい「他の条件が変わらないとすると」なんて前提があって、ひとつかふたつの要因を変化させると言うのがあるだろう。現実には、何でもかんでもが関連しているのだから、そんな前提はおかしく見える。最初に話題になった「限界効用逓減の法則」も似たようなものだ。

A: それぞれ。何が「限界」なんだ。

B: 恥ずかしながら、ぼくもちゃんと経済学をやっていないし、だいたいマルクス読みだったからね。これがわからなかった。サムエルソンの教科書を読んでから、ようやくわかったという次第。つまり、「限界」と言うのは、「追加的」のことさ。メンガー、ジェボンズ、ワルラスなどの偉い学者達が「限界革命」の担い手なんだが、リカードやマルクスが最も苦心した「労働価値」では説明がつかないことを「効用」という概念で説明したんだ。その時、効用と限界がひっついたんだ。

A: まだ、分からんね。

B: 経済学の大きな課題に何が一体「価格」を決めるのか、というのがある。これを交換価値とか使用価値で説明するんじゃないくて、需要と供給の「均衡」で説明しようというのわかるだろう。だけど、人々は毎日セリをやって値段を決める訳じゃない。需要そのものや供給そのものは何で決まるのか。例えば、今では1軒の家に2台や3台テレビがあっても不思議じゃないが、もっと欲しいかというともう要らないだろう。家も狭いから、4台目のテレビなんてタダでも要らないってことになる。追加的な効用は低下するんだよ。1台目は嬉しい楽しい、もう3台ともなると置く場所も電気代もバカにならない。限界非効用が増大する訳だ。

A: なるほど。そんなことか。自家用車が売れないのも、金があるとかないとかじゃない訳だ。

B: いや、これが大事なことで、もっと複雑な説明に使える言葉でね。新古典派と呼ばれる学派にとっては、一番重要な道具立てなんだ。ジェボンズは、「最終的」と言う言葉を使っていたんだが、フォン・チューネンが「限界」にしようと言って、結局マーシャルがそれがいいとして定着したんだ。もっとも、ケインズの異端の弟子のロビンソンなどは、「効用」そのものが「価値」と同じ形而上学だと指摘したんで、色褪せたところもあるが、これは結構応用の効く話なんだよね。限界収益とか、限界費用とかね。

A: そんなことが分かっている、じゃ、なぜあんなに多くの原水爆やミサイルをアメリカもソ連も作ったんだよ。地球を何百回も破壊できるんだしたら、とっくに限界効用はなくなっているじゃないか。

B: この場合、核兵器にも「効用」はあったのさ。米ソがそれを脅しのために積み上げ競争をやっている間は、効用は逆に「逓増」していたと言える。それが、ある日突然まったく価値のないものになってしまった。気がついたら、アメリカもソ連もパンクしていたんだよ。限界的な、最後の追加商品がそれまでのすべてのその価値を決定する。この核兵器については、タダより始末が悪いが、その通りになったんだ。

A: 毛沢東の予言通りという訳だ。つまり、アメリカ帝国主義はやっぱり「張り子の虎」だったんだ。皮肉にも。

B: 言うことが古いね。だけど、この理論ももう駄目なんだ。マーシャルは、核兵器ではなくて、黒いちごを摘む少年の例え話を使っているんだが、これは有名なんだよ。ところが、ロビンソンは、それを逆手にとって、おもしろい批判をしているんだ。「少年は最後のもうひとつのいちごの限界効用が、さらに追加される努力の限界非効用に報いるに足るだけのものではなく

までいちごを摘み続ける」と言うんだ。

A: だから。

B: 要するに、彼女は「少年はやめたいと思うまで摘み続ける」だけのことだ、と言ってしまったのさ。大層な理論も彼女の辛辣さにはかたなしなんだよね。アメリカもソ連も、もう核兵器を作り続けるのは大変だから、もう止めたいと思った。止めたら、ソ連は解体しちゃったし、アメリカには借金だけが残ってしまったという訳だ。

A: それで、ロシアも、金を貸せ、と世界中に言い続けている。貸してやってもいいけど、昔取った島はどうしてくれる、と日本は言う。どうなるんだろうね。

B: それぞれ、日本てのは、土地にこだわるんだよね。ちょっとした連想なんだがね、スミスやリカードの時代は、土地と労働が重要な関心事だった。それが、マーシャルやケインズでは、当然ながら、資本と労働に関心が移る。マルクスは言わば過渡期だね。だから、彼の予言の半分は当たったし、残りははずれた。なぜかと言うと、マルクスはリカードの方法論、つまり「収獲通減の法則」という「荷物」を背負ってしまった。かれは、資本の蓄積についての、今で言えばスケール・メリットに着目したのはいいが、資本の拡大は労働の増大に追い抜かれる、別の言い方をすると労働力は常に過剰だと考えてしまった。ところが、サムエルソンによると、第2次大戦後だけでも、アメリカでは、人口の増加の倍のスピードで資本蓄積が進んだ。資本家も労働者も豊かになった。経済学の主流もイギリスからアメリカに移ってしまった。

A: そのアメリカが赤字に苦しんで、信じられない程の債権大国に日本がなった。だけど、その割に、日本の経済学が主流になったとは聞かないね。君の荒っぽい仮説も的はずれかい。

B: そう言われると困るんだよ。だから、日本がいったい何を目標にするのか、と言うことになる。福祉国家、完全雇用、「生活大国」、あるいは依然として、経済成長一本やりなのか。だから、いろいろと検証する必要があると言えば、逃げ口上かも知れないけれど。この間に言われたような、「合成の誤謬」とか「市場の失敗」などから始めて、完全雇用や一般均衡論なども常識と違ってイデオロギーでしかないという意見もあるのだから、それらもきちっと検証しなくては。

A: おやおや、消去法か。トーンが落ちて来たね。それじゃ、少なくとも議論の前進は望めないよ。経済学も進化の「袋小路」なのかな。

B: そうかも知れない。120年前の限界革命の直前の頃も、「もう偉大な仕事はすべて為されてしまった」なんて言う経済学者が結構いたし、世の中の人々もそんなものかと思われていた。だから、何か、新しい武器というか、理論装置が要るんだろう。ポランニー、ウォーラステイン、サミンなんかも、いろんな意味で注目されたりしたが、これと言う決定打はないな。だからと言う訳でもないが、日本でも、宇沢弘文や並木信義などの非主流派に可能性を待つ動きもあるし、あまり注目されなかったけれど、村上泰亮も『反古典の政治経済学』（中央公論社）のような、言わば試論を発表している。ただ、ぼくの感じでは、今のレギュレーション学派や制度派経済学では、あまり斬新な意見は出そうもないんだ。どうということかと言うと、過去や現状をうまく説明するのではなくて、マルクスではないが、「経済学批判」が必要なんじゃないか。

いか。

A: なかなか夜明けは遠いな。今の日本の景気じゃないけれど、「斥候よ、夜は未だ明けぬか」だね。

B: いや、だからと言うと語弊があるが、おもしろいのはこれからだよ。これは、アメリカのマーソンと言う社会学者が指摘したことなんだが、「同時多発的発見」というのがある。限界革命にしてもケインズ革命もものだが、まったく同時に何の連絡も意見交換もなく、複数の人で画期的な理論の前進があった。本当に必要だったら、そんなことが起きるのではないか。最近の若い学者は、語学も数学も随分できるし、学説史的な理論の把握がうまいし、早い。根井雅弘、井上義朗、小野善康とか、また、実務畑からアカデミシャンになった植草一秀のように期待させる人もいる。そういう地ならしの後に、光るものが出て来ないとも限らない。日本はマルクスの伝統が厚いが、党派的学閥的な重しがなくなれば、ここからも何か期待できることが起きるような気もするよ。もう、死んだけど玉野井芳郎みたいな人もいたんだから。

A: だけど、蒸し返す訳じゃないが、例の「島の規則」で、巨人が生まれる可能性はきわめて低いんじゃないのかい。

B: アメリカでもね、大恐慌の経験から随分変わったんだ。ガルブレイスが35年前に書いた本で、自慢できるアメリカの経済思想家は、ヴェブレンとヘンリー・ジョージ、ヘンリー・チャールズ・ケアリーの3人くらいだと言ったが、ヴェブレン以外は日本ではあまり知られていないし、ヴェブレンだって1929年に亡くなったから、大恐慌は知らないんだ。ハーバードの黄金時代以降、優秀な人がどんどん出て来た。ノーベル経済学賞でもほとんどアメリカだよ。やっぱり、何かの困難と混乱が引き金だろうね。

A: バブルの崩壊から、目覚ましい理論でも生まれるのかね。それは楽観が過ぎるよ。

B: 問題はバブルだけじゃないさ。デタラメな政治の問題もあるけれど、もっと社会的に考えてのことだ。いろんな矛盾や課題が割りとはっきりと人々の前に露出して来ただろう。会社中心主義の結果が、「過労死」とか「希望退職」という名の退職勧告だったり、みんなが真面目に貯蓄に励むと、銀行スキャンダルとか地価上昇だったりすると、誰でも考え込むじゃないか。まあまあいずれ何とかなるよ、では済まなくなっているだろう。

A: 駄目だよ。日本人はみんな忘れっぽいんだから。証券スキャンダルだって、もう忘れてるよ。NTTの株が半値戻して、喜んでいるんだから。

B: 皆が忘れても、誰かが覚えているさ。そういうことが、大きく取り上げられることが大事で、いつか誰かが、そこから問題を解明して行くと思う。知らずに置かれていたら、駄目だけど、期待して注意深く見つめることも必要だし、ぼくでも、それくらいのことは出来る。

A: まあ、少なくともオタクの役割はそんなところか。

B: あっ、馬鹿にしてるな。じゃあ、最後に経済オタクの大風呂敷。と言っても、ほとんど他人の受け売りだけだね。

A: どうぞ。

B: 真剣になられちゃ言いにくいんだけどね。ケインズは大きな体系を云々する時代は終わったと

言ったんだけど、ぼくは違うと思う。やっぱり、この時代の「不安」に応えてくれる理論の基軸が必要だ。マルサスが人口と農業の問題に応えようとしたり、リカードが自由貿易と産業育成を考えたりしたのも同じだと思うんだ。

A: それは甘えじゃないの。何かおまじないのようなことをみんな望んでいるだろう。何となく不安と言うのは確かにあるが、そんな漠然としたことに経済学が応えてくれるとは思えないね。

B: 心理的精神的な不安感といったって、何か根拠があるはずだ。もち論、それは時代と言うか、社会状況やほかのことで随分違う。だから、それが何かを示すことが必要なんだよ。ガルブレイスは、「あるまじった経済学を考え方を評価する最後の決め手になるのは、それが時代不安を浮き彫りにしてくれるかどうかである」と言っている。問題やトラブルは一杯あるだろう。それこそ、ごちゃごちゃと議論もされているさ。経済行為のなかに世間が批判することもたくさんある。そんなことをきちっと、問題として説明しなくちゃならない。説明できれば、解決が見つかる。と言うより、説明できないことは解決もできないんだ。何で失業が増えるのか。ケインズ以前の均衡論では、説明できなかったんだよ。

A: えーっ。不景気になれば、失業者が溢れるのは当たり前だろ。景気が良くなれば、失業者は減るさ。単純なことじゃないか。

B: いや、それじゃ何も説明したことにはならない。失業者が増えるから不景気になったと言うこともできるだろう。つまり、景気の変動を説明しなければダメなんだよ。ジェボンズのような数理的にしっかりした学者でも、晩年は景気循環の太陽黒点周期説にこり固まってしまった。ハーシェルと言う当時の一流の天文学者と親しかったから、データを貰っていたんだ。ところが、観測の精度があがると、黒点の周期が変わってしまうんだよね。だから、ジェボンズは大恥じをかいた。今の日本でも、有名な銀行系シンクタンクの中に「太陽黒点周期説」を信じている人がいるんだ。人間はどこかでそんな神秘的なものを求めるんだろうか。それはいいとして、労働市場で賃金が均衡するとすると、失業者は出ないことになる。つまり、賃金が下がれば、労働需要が生まれるはずだから、賃金が上下するのはわかるとしても、失業者が増えたり減ったりはしないことになるんだ。

A: だとすると、それは理論の方の欠陥じゃないか。

B: だから、ケインズだったのさ。彼の「完全雇用」という概念と『一般理論』は、時代の不安を浮き彫りにしたし、その登場は衝撃的だった。同じことを、同時にカレツキも考えていたと言う不思議なこともあったんだがね。ところで、誰が考えても、完全雇用とか物価安定というのは結構な話だ。どんな職業かはともかくとして、希望する人には必ず仕事があるのは、本当でないよりはましだからね。だけど、問題はまたさらに余計に困難になってくる。

A: 人間てのはゼイタクにできているからね。仕事があればあったで、3Kがイヤで、3Kが欲しいということになる。

B: Kはわかるが、「ク」ってのは何だ。初めて聞いたな。

A: いや、これはぼくの勝手な言葉なんだ。ラク、トク、カク、の3K。つまり、楽、得、格。

B: なるほど、当たっている。だけど、問題はそうじゃない。完全雇用は、いつもインフレの危険

と隣合わせなんだな。それと、投資。このごろの新聞でも、企業設備投資の減少が不景気の原因なんて出ているだろう。ケインズ理論が常識化した証拠なんだけど、投資を刺激するという事は、将来の生産力が増大することだ。ということは、それに合った需要や消費がなくては、また、たちまち不景気になる。まして、スタグフレーションなんて現象が先進国に出て来た。インフレ下の不景気となると、もうケインズ理論では説明がつかない。そこで、マネタリストや合理的期待形成仮説やサプライサイド・エコノミスト。サッチャリズムにレーガノミックスで、もうむちゃくちゃになってしまった。面倒だから、「市場」の原理に任せて、規制緩和しろ、なんてことも出て来た。それで、バブルに先進国同時不況だ。

A: 経済学の無政府状態。そこで、巨人待望論かい。危険だよな。

B: ことは政治の問題じゃないから心配ないよ。だから、現代物理学じゃないけれど、経済学にも大統一理論が必要じゃないか。そこでまずは、やはり「資本」だ。東大の三輪芳朗は、曖昧だから、資本主義という言葉はやめようと言っている。資本の深化と拡大では、全然意味が違うんだが、さっきの大きな枠組みで言えば、資本と労働の時代が終わりつつあると思う。次は、何かはともかくとして、平田清明なんかは依然として、資本主義体制の「調整」は、商品の過剰生産と最終消費需要の相対的過小との対立を通じて、「過剰資本破壊」という形をとる、と言っている。それは、例えば恐慌とか、きついリストラのことを意味している。だけど、資本てなんだ。貨幣資本と資本財、流動資本と固定資本と言うけれど、実物と名目と言うか信用は別々のようだが、簡単に切り離してできない。誰かの金融資産は、他の誰かの負債だ。たとえば、今ある100億円のオフィス・ビルが空室ばかりで収益の役に立たないとしても、それを100億円の半導体工場に変形することは出来ないだろう。「過剰資本破壊」と言うのは、それを無理にでもせよ、ということになる。誰が、何が、そうせよと命令するのか。金利とか金融のバランスだ。企業の決算書だ。家賃の入らないビルの価値は50億円かも知れない。負債で作ったビルだとすると、返済も利払いもできない。でも、そのビルの効用とか使用価値は、金融状況や景気の状態で破壊されてしまっているのだろうか。100億円くらいで、世の中がどうにかなる訳じゃないが、そんな「不確実性」に経済が耐えられないところに来ているんじゃないか。シャックルと言うイギリスの学者は、「経済活動は希少性にたいする対応のみならず、不確実性にたいする対応でもある」と言ったけれど、その不確実性の幅がどんどん大きくなるのか、それが怖いからもう何もしないのか。こんな経済システムを続けていると、溜め込んだ核兵器じゃないが、ある日ドスンとゼロになってしまう。つまり、資本蓄積と言うのは、一方でどんどん債権、請求権、将来の購買力をためて、その一方では、機械や工場、住宅、ビルやコンピュータ、道路や港などを作って行くことじゃないか。そうじゃないとまらない。ところが、ケインズは、「経験によれば、社会的に有益な投資政策が最も利潤の多い投資政策と一致するという明白な証拠はまったくない」と言った。資本や金利、利潤や収益、つまり貨幣の損得で測定することであまく行くとは思えない。「貨幣によって測定しうる価値のみが重要と目されるべき唯一の価値であるかのように見せかけるイデオロギーと戦うこと」がロビンソンの決意だった。やっぱり、ここから出発するしかない。

(1993.6.12.記)

1. 鬱病は現在ではポピュラーな病気として「誰でもかかる可能性があり」「風邪を引いたようなもので」「必ずなおる」といわれようになった。ところが一方では薬物や、環境変更に反応しない・長期にわたって軽快しないタイプや、児童期・青年期の重篤な鬱病が多くなったようだ。外来でも鬱病の患者さんが半数以上占めるのではないだろうか？ たしかに、いわれるように鬱病の患者さんの一部は抗鬱剤によく反応し、数カ月で症状は軽快する。症状のうわべをとるだけならば、一週間以内でも消失可能である。ところが症状の軽快は一時的で薬物を減らしたり切ったりすると元の症状が再現して本人も医師もがっかりさせられることが多いのが現実である。反対に薬物に反応せず、鬱状態が持続するための苦痛から自殺企図を企てた青年が家族や友人に励まされて、一から出直す方針に切り換えたら病気から解放されたり、長期にわたって自閉的生活をしたあげく、自殺目的で夜中に車で出掛けようとしたところを家人にみつきり、そのまま入院した女性が、退院後、恋人ができたことをきっかけにして立ち直ったりする。こうしてみると、鬱病に対する医学的言説のの限度と鬱病自体の本性的見直しの必要を感じる。

現在遺伝学、分子生物学、画像診断法、操作的診断法の発達を土台にして鬱病に対する生化学的研究が盛んであり、将来もその方向に研究と治療が進むだろう。しかしその進歩の分だけ、患者さんの生きた文脈から得る情報も少なくなってくるのではないかと危惧される。そこで鬱病の研究を、広い視野から振り返る必要が増大する。

2. アリエテイ、ベムボードは「うつ病の心理」(誠信書房 1989)で、うつ病概念の批判的回顧を試みている。彼らの回顧は精神分析にやや偏っているが、整理の一助としては都合がよいので要約しておく。アブラハムは病気の素因となる要因について、a. 口唇愛の過度の強調に関する素質上の要因 b. 不相応な不平の申立てや、毎日の過剰な口唇活動にみられる特殊な口唇期リビドー固着 c. 最初の感情倒錯と呼ばれる児童期の鬱病の原型を導き、連続的な愛に対する失望より生ずる幼児の自己愛的心的外傷 d. 後の人生における初期の失望の反復、などであり「抑うつ的な人が、愛の対象が絶えがたい失望をうける時、彼らは対象物をあたかも排泄物のように追い出し、破壊する傾向がある。彼らはそこでそれを取り込むことと、むさぼり食うという行為をなし遂げるのであり、それは明らかに、自己愛的同一視の抑うつ型の行為である。復讐への加虐的渴望は、自我を苦しめることに満足を見出すのであり、快樂の一部分としての活動である」としている。

フロイトは「悲哀とメランコリー」(1917)において悲哀とメランコリーの類似性を、喪失への痛切な失意の感覚、外界に対する興味の欠如、愛する能力の喪失、活動性の抑制にもとめ、メランコリーでは、自責感を口にし、不合理な罰を期待するところまで自己愛を低めるところに特質をみる。フロイトは、その自責感は、実は自分自身に向けられているのではなく、その患者が愛する人、愛した人、愛さなければならなかった人に向けられていると推測し、結局自責感とは患者の自我に移された愛の対象に向けられた非難であるとする。鬱病者は、児童期に愛する人への失望により傷つけられた強烈な対象関係を形成し、対象関係が破綻すると、患者のリビドーは他の対象に向かわず、自我

のなかに取り込まれ、愛の同一視が自我の一部と、見捨てられた対象の間に形成され、この自我同一視がリビドーを取り込む「かくして、対象の影は自我の上に落ち、それ故に後者は、今より後、見捨てられた対象の如き特別な精神的機能によって非難されるであろう」。それゆえ、失われた対象の内面化された偶像は、その人の両極的感情の的となる。かくてメランコリーにおける三つの決定的要素は、対象喪失・極端な両価性・自我へのリビドーの退行、である。のちにフロイトは自説を修正して超自我と自我との関係を考察して、メランコリーを超自我と自我の不一致の結果とした。

ラドーは、鬱病になりやすいタイプの人について「彼らは愛され、尊敬され、そして賞められていると感じる時にのみ、安全感と気楽さを感じる。彼らの本能の充足がほぼ正常な活動を示して、目的と理想を実現するのに成功しても、自尊心は、他我から承認され認知されるかどうかに大きくかかっている」とし、必然的に他人から愛情の表明を引き出すのに巧妙となるのでその愛情は専制的となり、愛の対象はその不当な扱いに耐えかねるところに追いやられ、その結果喪失がおき、人は鬱病に陥る。すると彼は、後悔、懺悔、自責によって憐れみと罪の意識を他我に引き起こすことによって喪失した対象を再び得るようにする。この回復過程が成功しなければ外的対象は断念され、自我は愛の対象を置き換えた超自我から寛大さを求めることになる。即ち自己否定と自罰による超自我の愛の獲得である。後にラドーは自説に広がりを加え、鬱病は自己の弱さと、怒りによって思いどおりにすることができないために自分を軽蔑するのだと考えた。鬱病者の板挟みは、抑圧的な怒りと服従的な恐怖の間で彷徨い、彼らは愛の対象に対して激怒を表明したいが、それに依存もしているので敵意を露にできない。この均衡が崩れて、鬱病者がその対象を失う時、彼らは怒りのはげぐちを自分に向け、同時に愛の対象を取り返したいと希望しながら、代償不全に陥るといふ。

フェニヘルは「自尊心が外部からの供給に規制されている状態に定着した人とか、罪の意識の感覚が動機となって、この状態に退行する人は、絶対にこれらの供給を必要とする。彼はこの世界を、絶え間無い貪欲に駆り立てられて、通り過ぎていく。彼の自己愛的必要性が満たされなければ、彼の自尊心は危険なところまで低下していく」とのべて鬱病の中心問題を自尊心においた。この方向に研究を継続したジェイコブソンは、鬱病では、超自我(外の世界から独立した、自己表象に対するリビドーと攻撃的備給を規制する体系)の不十分な区別と、児童期の親の理想からの対象表象の適切な分離の欠如を伴った、自己に対する攻撃的備給が存在するとして、すべての感情障害の基本的葛藤は、欲求不満がついた時、怒りが生じ、それは望んだ満足感を得るために敵意ある試みにいたるが、もし自我がこのゴールに到達できないなら攻撃性は自己像に向けられるとした。ここで、健康な人では超自我は抽象的・非人格化された力として発達していくが、病情的状態では、超自我は十分に形成されず、過去の人物と結びついており、外界の対象と混同されやすい。超自我のこの区別の欠如が、自己表象の適切な備給を妨害し、自尊心にも影響する、とされる。鬱病者では、規制された自尊心を維持するために過大評価された他者と関わる必要があるのは、この理由からである。

ビプリングは、抑うつ患者の共通特徴として、自我の実際上あるいは想像上の頼りなさ、および自我の満たされない強い自己愛的願望の自覚をあげて述べ、「鬱病は、自我の頼りなさや無力な状態の感情的表現として定義されうるものであり」としている。

サンドラーとジョイは、鬱病を、頻繁であるが独占的ではない他者との関係の媒介物である理想的状態を奪われた感覚であるとしている。

一方クラインによると、鬱病になるもっとも重要な素因は、乳児が、愛される良い対象を自我のなかにつくりに失敗することである。

コーヘンらのワシントン・グローブは、空虚さの内的感覚と、外部の者が矯正しなければならない支持に関する絶えざる欲求を鬱病の原因としてあげる。彼らによれば、患者の殆どが、対決や直接的競争を避け、勤勉で、強迫的であり、他人に依存的欲求をする、換言すれば彼らはその環境における権力者の価値観や意見を取り入れる傾向にあったと述べる。

ボニムは、鬱病者の外面的行動の多くが、隠された敵意であると解釈し、ベッカーは、文化的価値観にはあまりにもよく従うが、自分の幸福感のためには嚴重な責任を課する役割意識過剰な人々を鬱病者として描写する。

セリグマンは動物実験に基づいて、鬱病者は、外的圧力を制御できないと感じているとした。

以上の諸見解と自らの経験を総合して、アリエテイらは独自の見解を打ち出す。

「重症鬱病の精神力動」(149P)では、児童期・前うつ病者の性格・重症うつ病の発展が述べられている。

3. アリエテイらによれば、鬱病者の児童期は、子供が、大人の影響の全てを喜んで受け入れるということで性格づけられる。他者の受け入れと他者の好みを取り込む受諾性は、前・鬱病者の特異な性格特性を育む。彼は外向的で従順な者となる。この受け入れ準備性は、彼を病理的ないし誇張的な取り込みへと駆り立てる。つまり彼は他者に過度に依存する傾向となる。彼らは、赤ん坊の時に満たされていた愛情と幸福な状態を取り戻すために精神的負担が重くても両親の期待にしたがって生きなければならない。両親の期待に沿えないことに基づく不安は罪悪感に変化する。こうして彼は重要な他者(significant other)と係わる時に、過度に従順な態度を発達させる。次第に彼は、人生の諸目標に向かって努力するようになるが、それは最初重要な他者を喜ばせるためだったのが、そこから独立して目的そのものとなる。その重要な目標は精神の大半を占めて他の目標に対する余地を残さず、柔軟性を欠落させた業績志向主義と化す。

前・鬱病者の性格は、上記であげた一連の生き方のパターンにより部分的に決定される。他人を喜ばせ、他人の期待に従って行動することは避けがたいので、彼が自己と真に触れ合うのは不可能となる。もし彼が一連の行為の中で不幸や無益な感情、空虚感を実感すると、それらのために自分は責められるべきだと信ずる。このように患者が維持し得てきた均衡は人頼みであり、患者が喜ばせなければならない人との関係によって保持されている。この人物は、もはや重要な他者でなく、支配的他者(dominant other)である。この関係は単に服従と支配関係でなく、この態勢のもとで感動、愛着、友情、依存等が存在するのである。支配的他者は、患者に多くを要求するとともに多くを与える人でもある。そのもとで患者は自己評価を低くし、自己を安売し、裏切る。

重症鬱病の発展には、主な促進的状況がある。a. 支配的他者との関係が失われたと患者が実感すること、b. 支配的他者の死、c. 支配的目標に到達しようとする試みに失

敗したという患者の実感と、それに続く自己像の否定的再評価。主要な対人関係の悪化に伴う鬱病では、患者は、この悪化の原因を自己に帰する。彼には支配的他者が必要なのであるから自分の認知構造を変えようとせず、沸き上がる考えの全ては抑圧されて抑うつ感覚だけが意識されるので思考過程は緩徐化する。支配的他者の死、喪失、不在に伴う鬱病では、無意識に患者は、支配的他者が去ることに責任があると感ずる。患者が支配的他者をよく扱っていれば支配的他者は死ななかつたかもしれない。かくして、彼は支配的他者を「殺した」のである。あるいは、彼が生きていたときに微かに感じた憎悪の念が死を招いたと患者は感ずるので患者は罪悪感に襲われる。あるいは、支配的他者に依存できず、患者は自己に必要な物を自己に供給する「自律的満足」を得ることができない。支配的目標への到達失敗の自覚に伴う鬱病では、人生の大半を占めた幻想が空虚化する。アリエテイのこの著作では、このあと軽症鬱病の精神力動等が続くが、当面の議論には以上で充分であろう。

4. だが、アリエテイらの議論では、行為の次元が視点から欠落している。この次元を社会的見地からメランコリーの研究に付加した人にレベニーズがいる。彼は「メランコリーと社会」(叢書ユニベルシタス 法政大学出版会 1987)で、マートンの理論を引き合いに出しつつ無秩序としてのメランコリー概念を抽出している。彼によれば、マートンは文化目標と当の目標を達成するために制度化された手段を受け入れるか、拒否するかに応じて適合様式を区分している。それには五つのタイプがある。同調型・改新型・儀式型・敗北型・反逆型である。このうち敗北型の人では目標と手段が受動的に拒否され、彼らは社会に存在するが属さないジャンルに帰属する。これらの逸脱者は、社会を攻撃しないが、疑問視する。その代償作用を空想のなかで手に入れるが、彼らはお互いに離れ離れであり、反応の受動的が彼らに許すのは集团的生存でなく、私的で特異な生存である。レベニーズはマートンから引用している。

「それにもかかわらず、敗北型という症候群は何百年ものあいだ怠惰accidie(もしくはacedy, acedia, accidiaという変形もある)というレッテルを貼られてきたし、ローマ・カトリック教会によって七つの大罪の一つと解されてきたのである——数えきれぬほどの精神医学者たちが、感情鈍麻(アパシー)やメランコリーもしくは「快感消失」(アンヘドニア)という形態におけるアケーディアと取り組んできた。」

マートンは、最終的に敗北型に収束する逸脱行動の中間点として儀式型を叙述する。儀式型では、文化的に規定された目標に対する拒絶が、目標達成の手段の堅持と結びつき、生存競争から、身分=不安、目標引き下げやルーチンワークや行為一般に対する恐怖に及ぶ一連の儀式型行動を確認し、マートンのこの考えが、ジャネにおいてメランコリアの感情における本質的要素としての行為の恐怖と規定されているものと関連することを示唆する。結局マートンが述べた逸脱行動のシークエンスは、文化の自明性の喪失—それは同じように行為に対する恐怖の増大を伴う—を表現している。かつて目標と手段に対応していた行為は儀式型に移行することで目標=志向を失う。だが価値の追求は行為一般を可能にするために必要不可欠である。この必然的な価値ないし目標の要求は、当の文化目標追求達成の義務の不安=圧迫感のもとで、行為そのものの手段へと転位し、

こうしてパレートによって名付けられたような行為の欲求の崩壊の進行が、敗北型と受動性において終息する、とされる。マートンは、現在のアメリカ社会とその経済行動を指針としているとするが、実際には彼の記述のパラメーターとして現れるのは、秩序という概念であり、この視点からは敗北型の人々は、社会に在るが(実質的的定位)、社会には属していない(形式的定位)という図式にあてはまる。マートンによって記述された敗北型というかたちをとったメランコリーは、(一連の役割= シークエンスの可能性を目前に見ている)よりダイナミックな記述においては、秩序の喪失として、またスタティックな記述においては非=秩序、非=同調型、無=秩序として把握できる。

レペニースは、1621年の、ロバート・パートンの「メランコリーの解剖学」に言及してユートピア概念と秩序=行為概念の照応性を論証する。近代のユートピア的思惟においてはメランコリーは禁止されるのである。更に18世紀ドイツにおける市民的メランコリーの起源について、レペニースは社会に対置されるべき原理としての自然の発見と内面性の補完関係を論証し、行為によってあげることのできない実効は、諸情感に移される、とする。この反転は、市民的世界逃避の結果であるとレペニースは主張する。換言すると、権力からの孤立は内面性へと逃避するメランコリーを生み出す。レペニースがメランコリーを行為、権力、との関連において考察していることに注意しておこう。その関連において反省概念も又規定される。支配関係の強制から行為抑制が生まれ、行為抑制から反省が生まれ、そして現実が喪失する。レペニースは精神医学者たちの文献を引用している。ジャネは「おのれの行為に不満を抱いている患者たちは、おのれ自身をみつめるし、観察したせいで、自己自身についての心配から、一種の永続的な自己=分析におちいる」「行為に対するあらゆる恐怖のうちには、なによりもまず、行為の抑制が存在している——メランコリーの場合には、行為の抑制が起こった」といい、フロイトは「あらゆる作業の抑制」をいう。マイヤーは動物実験に関連させて「断念は、むしろ動機づけの完全な欠落を意味するし、状態を変えようとするいかなる努力も含んでいない。意気消沈した個人も同様に、建設的に反応することができないように見えるし、おのれの周囲に対する関心を欠いているのである」という。クレペリンは、メランコリーを「紛れもない決断と、それを行為に移すことに反対する抑制によって」特徴づける。ドライフースは「労働能力の欠如をひき起こすのは不安や、落ち着きのなさや、特殊な諸観念への集中ではなく、内的な麻痺という明白に意識される感情、つまり抑制である」という。総括的に彼は問うている。「メランコリーは心の一状態である。この状態は諦念が最終妥当性という性格を帯びるに到ったとき、成立する、と言うか、成立したと称される——正当化に対する要求は、もはやいかなる反応もまったく許さないような感情鈍麻状態(アパシー)にまで立ちいたっていない時に生ずる。その前に、世界をめざしてもはや行動することができないという意味で、世界喪失が考察されるべきである。しかし世界喪失と共に、もろもろの自明なことの喪失が完了しているのであり、この喪失は直接正当化の問題を招来し、もろもろの新しい自明なことを構築しようとする傾向がある。このことはいったい成功しうのか」(246p)と。今やこの問いに答えるべきだろう。

5. アリエテイらのメランコリー・鬱病概念を、精神分析的枠組みから拡大してモデル化する

ることが許されるとすれば、それは宗教モデルだろう。支配的他者への信仰と依存と反発関係は、そのまま神等への信仰関係に連関可能である。神は、喜びとともに充足をもたらすが、神への背反は、罰をもたらす。

「愚かな者共よ、日の神ヒュペリオンの牛を食らったばかりに、神は帰国をかれらより奪い、おのれの愚行でかれらは身を滅ぼしたのだ」(ホメロス オデュッセイア 第一巻)

現代社会では、信仰は、人格から物に移行しているので、物に対する反抗はできないという意識に圧倒されて、社会順応的行為以外の選択は自然必然的に不可能であるように見えるところから、生への欲求と可能性を宿した行為の抑制と諦念=メランコリーが生ずる。だが鬱病者・メランコリー者は、神への信仰・現社会への信仰の枠内を動き回っているだけで、精神病者のように、社会的諸連関に対するより根本的拒絶には到らない。それは丁度ミルトンが失樂園の中で神を憎悪しつつ、

「すべてが失われたわけではない——まだ不屈不撓の意志、復讐への飽くなき心、

永久に癒すべからざる憎悪の念、降伏も帰順も知らぬ勇気があるのだ! 敗北を喫しないためにこれ以外何が必要だということのか?」(失樂園 第一巻 105)

とサタンに語らせ、「妥協の余地のない永遠の戦いを挑む」としても、サタンは神の信仰の圏内で動いており、神に依存はしているのと同じことである。

他方では、資本はより高度な新社会の諸要素の創造のための有利な諸条件を形成するから、物神崇拜の成立の基礎をも掘り崩しており、かくしてオルタナティブな社会運動が新たな政治的次元を獲得している。こうしてメランコリーを生む社会は、自己を貫徹するとともに自己を癒す条件を整えつつある。これがレペニースに対する解答である。

レペニースは世界を単一と思考するので解を出せないが、そのように世界を一意的にみる必要がないのである。個人的次元でも同様な二重の事態が進行しつつあるのだろう。これがいわゆる「鬱病の遷延化」とともに「鬱病の軽症化・普遍化」といわれる一見矛盾するような現象の背後で進行しつつある社会的過程ではなからうか。

急性白血病との闘いのプロセスで鬱状態に陥った女性は、自分は今まで他人に評価されることを基準として生きてきたが今、病気になって、自分と初めて触れ合った、それは恐ろしいが乗り越えなければならない過程である、と語った。彼女の病勢の激しい時には、人に見られているという監視妄想や幻覚が激しかったが、彼女はそれを乗り切ったのである。優しい夫が職場を代えて彼女を支えたことと無関係とは思えない。

大学卒のある青年は、卒後入社した会社の研修プログラムに耐えられず研修段階で会社を辞めたが、その後コンビニとかのバイトを転々として次第に鬱状態となった。体の違和感を絶えず覚える心気症でもあった。彼の状態は色々な精神安定剤に反応しなかった。彼は失望して薬物を多量に飲み救急車で運ばれてきた。彼は家族と話し合い、過去にこだわらず、望みを捨てて一からやり直すことに決意した。彼がその決意を述べた時の表情はすがすがしいものだった。彼のやり直しは大学信仰の放棄から始まるだろう。こういう例をみても鬱病に対する医学的言説の限界と同時に人間の柔軟性の強さを感じずにはいられない。

政治的煽動と商品による動員

国崎 俊

I

「書を捨ててカネを稼ごう — 中国の小中学生」と題するコラム記事が日本経済新聞5月19日(夕刊)に載っている。記事には次のようにある。「開発が進む中国沿海部に近い農村地帯で、小中学生の『流出』が深刻な問題になっている。『勉強よりカネもうけ』の風潮が広がり、学校へ行かずに大都市などに働きに出る児童・生徒が急増しているのだ。中央、地方政府も事態を重視、『子供を学校へ行かせよう』とキャンペーンを始めた」。この記事によると、河北省のある県では1688人の中学生のうち272人が流出、また湖南省のある県では小中学生の流出がひどいところで40%、河南省のある県の中学校では90年に入学した120人中30人が翌年までに流出、91年に高校受験をした者はたった37人であったなど。

この記事をもて、文革期の紅衛兵・紅小兵のことを思わざるを得なかった。私が言うのは、いわゆる下放のことではない。毛沢東への謁見を求めて全国から続々と北京に向かった小中学生たちのことである。『毛沢東語録』をポケットに、紅衛兵、紅小兵の赤い腕章を巻き、赤旗を掲げて徒歩で、特別列車で、次から次に北京に向けて動いた彼らの姿を、そして天安門広場を埋め尽くした彼らの大軍を、あの頃何かの映画で観た記憶がまざまざと甦った。多かれ少なかれ毛沢東シンパであったわれわれはそうした姿にある種の羨望の念を抱きながら、しかしかすかな疑念をも抱いたものであった。

かつて、小中学生をとらえた政治的煽動の力と、今日、小中学生をとらえている商品の動員力との対照を否が上でもわれわれは迫られている。人々を突き動かし、組織し、こずきまわし、翻弄し、押し潰し、鼓舞し、勇気づけ、巨大な歴史の流れのうちに巻き込む力としての政治的煽動の力をわれわれは信じて疑いはしなかった。戦術はいずれにせよ政治的煽動と固く結び付いていた。しかし今日、われわれは戦術とこの政治的煽動との関係についてしっかりと問い直すことを求められている。

II

煽動というものへのあまりにも俗っぽい・うすっぺらな理解が世間に流布しているにせよ、煽動のマルクス主義的概念を揺るがせにしてよいわけではないだろう。政治的煽動は戦術と固く結び付いており、革命的理論が大衆をとらえるというときのそのとらえ方の一つを指している。大衆をとらえるということは決して単に人々の熱気を組織することでは

ない。大衆をその生活においてとらえることを意味している。しかもその場合、政治的煽動は人々が自らの生活を国家との関係においてとらえ、国家権力の構造を問うところに導くものでなければならない。国家が諸階級の非和解性の産物として、その剥き出しのあり方を現前させることが煽動の意義である。

こうした政治的煽動の意義を問い直すことが求められている。その場合、政治的煽動が人々をその生活においてとらえるものである、というところからメスを入れることが必要であろう。ここから先の中国の紅衛兵と新聞記事の例を思い起こしてみよう。彼ら子供達を生活においてとらえるということはどういうことなのか。毛沢東思想という政治思想に基づく政治的煽動の力と、商品の運動による動員力のいずれが一体人々をその生活においてとらえているのか。だがそもそもそうした問いが無意味であろうか。問題はそこにおける生活なるものであろう。

III

プロレタリアートの社会革命とはプロレタリアートの自己否定ということであった。このことは、プロレタリアートの革命=共産主義革命が、商品・貨幣の廃絶・死滅を成し遂げるものであるという点においてもっとも良く示されるものであった。人々の創造的力の一切が商品として、商品-貨幣の力として現われるということの否定、つまり商品・貨幣の廃絶・死滅はだから人々の生活・あり方そのものの根底的な自己否定であるからである。今日、多くの人々が自然成長的に商品・貨幣のあり方そのものに目を付け、その廃絶・死滅を問題にしているということは、別の角度から言えば、人々が様々な形で、自らの生活のあり方そのものを問題にしていることを指している。

このような時代に政治的煽動の役割はかつてとおのずと異ならざるをえない。戦術観の転換が求められているのである。

生活の深さというものを考えること、そのことが自己否定の徹底性を規定することになる。

協同組合資本論

安藤一夫

A. 資本の原理的考察

1. モンドラゴン協同組合原則

モンドラゴン協同組合グループの協同組合原則（『ASSB』誌1号23頁参照）には、労働と資本について次のように述べられている。

「(3) 労働の優越性

労働が事物、社会、人間の基本的な変革要因であること

- a 賃金労働者の制度的請負雇用を廃止する
- b われわれの組織において労働の完全な優越性を追求する
- c 生産された富の分配において労働が本質的な基準となる
- d 労働の機会を社会の成員の全てに拡大するというわれわれの意思を表明すること

(4) 資本の道具的従属的性格

資本は労働に従属する道具であり、次の点を実現する上で必要であり価値がある。

- a 公正、適正な金額が制限された報酬。この報酬は獲得された収益に直接連結しない。
- b 協同組合が自由加入の適用を可能にするために協同組合を継続し発展していくため、収益の処分ができること。」

ここでは、資本は労働に従属する道具とされている。これは資本主義社会における資本が労働に従属させている現実と正反対のものである。協同組合の資本といえども、資本主義社会のなかで機能していく以上、通常の資本としての性格をもたざるをえない、という有力な見解があるが、どうであろうか。この点について検討しよう。

2. 商品・貨幣における物象化

商品・貨幣を廃絶できるかどうか、という問題についてはすでに原理的考察がなされている。それらが商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって生成されるものである以上、それらを意志の力でもって排除することは出来ないであり、ここからソ連共産党の試みが何故失敗したか、ということも明らかにされたのである。

では、資本の場合はどうであろうか。

資本も、商品や貨幣と同様、一つの社会関係であり、その関係には、人格の物象化、物象の人格化が認められ、物神性がまわりついている。しかし、資本の場合、商品や貨幣と比べて、物象化のシステムが異なっているし、従って、物神性もその性格が変化してきている。これらの諸点について解明しよう。物象化を意志支配のシステムと捉えること、このことが商品・貨幣における物象化を把握するための根本であった。資本においても、それが人格の意志を支配するシステムであることが示されねばならない。

まず、商品・貨幣における意志支配について、ふりかえってみよう。諸商品は、自らの社会関係においてそれぞれの使用価値としての差異をお互いに反照しあうことによって抽象し、かつ、この抽象したものとしての価値を、ある使用価値の量で表示することによって、量的判断を提示する概念的存在であった。商品が抽象し、判断する概念的存在であるからこそ、商品所有者は、自らの意志を商品に宿すことが出来るのであった。

諸商品がお互いに社会的に通用しあうための形態をつくりだすためには、諸商品は単一の商品でそれぞれの価値を表現する、という共同行為をとらなければならないが、諸商品に意志を宿した商品所有者たちは、この商品の本性に従って、無意識のうちに共同行為を

行い、貨幣を生成させる。ここに商品による意志支配が完成し、人格が物象化し、物象が人格化する。

こうして生成された貨幣は、商品のように単なる概念的存在であるだけではない。それは自己を増殖する、という一つの衝動をもった存在であり、この衝動が、貨幣所有者の意志と意識とを支配する。

貨幣が衝動をもつことは、貨幣において物象化が二重になされていることにもとづいている。商品所有者は商品に意志を宿すことによって、人格的な力を物象に与えてしまうが、それが同時に本能的共同行為を呼び起こすことによって、諸物象に与えられた力を単なる物として現象している一つの物象（貨幣）に集中してしまうのである。この二重の物象化によって、商品所有者たちの社会的な力が、貨幣を所有している私人の私力的力に転化する。この転化過程が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為としてなされるので、社会的な力を与えられた私物である貨幣は衝動をもたざるをえない。

平たく言えば、何でも買える、という点で、質的に無制限なものである貨幣が、所有者の手にあってはたえず量的に制限されており、ここから、貨幣蓄蔵の衝動が生じるのである。

3. 資本における物象化

資本とは自己増殖する価値であり、本源的には貨幣蓄蔵の一形態である利子生み資本であった。従って、資本も衝動をもった存在である。しかし、今日の資本は、 $G \cdots G$ で示される前期的利子生み資本ではなく、 $G-W \cdots P \cdots W-G$ で示される産業資本をその一般的範式としている。

産業資本は社会的生産を組織している。資本の衝動が資本家において意志と意識を得て

人格化することは理解しやすい。しかし、この資本は社会的生産の帰結でもあり、資本の直接的生産過程が人格の物象化過程であることが示されなければ、資本における物象化を解いたことにはならない。

資本家と労働者との間で労働力が売買されることが、資本の直接的生産過程の出発点であった。単なる売買は商品所有者双方の間の不平等をもたらすはしない。しかし、資本家に労働力を売ることによって、労働者が資本の生産過程に加わると、本来労働の主体である労働者が、労働の客体である生産手段に使われる、という転倒が引き起こされる。

たしかに、労働しているのは労働者であって、生産手段ではない。しかし、価値の増殖という見地からすれば、過去の死んだ労働が、現在の生きた労働を吸収し、自身の価値を増殖するのである。労働の成果である価値増殖を得たのは資本の側であって、労働の側ではない。

資本の生産過程においては商品として購入された労働力が消費されるのであるが、その消費過程では、実は、価値増殖をもたらす可変資本の機能が期待されていたのであった。だから、労働者は、生産過程では、自分自身を再生産する賃金に当たる労働を提供するだけではなく、そうとは意識せずに剰余労働を提供し、資本を生産しているのである。この意味で、生産過程においては労働者は、可変資本に物象化されている。労働力の売買の帰結は、労働力の可変資本への物象化であった。

では、労働者に対する資本の意志支配はどのようにしてなされるのであろうか。資本家とは異なって、資本の致富衝動が労働者に人格化するわけではない。あるいは資本家に人格的に屈服しているから、資本家の指揮に従っているわけでもない。労働者は生産過程で

自分自身が可変資本に物象化され、自分を従属させる力である資本を生産し、再生産しているが故に、資本家に自らの意志を領有されざるをえないのである。

とはいえ、生産過程においていかに可変資本に物象化されていようと、労働者は、意志と意識をもった人格である。この人格を物象化させたままにしておくためには、社会的強制が必要である。この社会的強制について解明するためには、上部構造論と階級闘争を視野に入れねばならない。今回の課題のためにはここまでの理解で十分である。

B. 資本の歴史的考察

1. 資本の廃絶の諸問題

商品所有者による貨幣生成の共同行為が無意識のうちになされたのと同様、資本の生産過程で、労働者は、意識せずに資本を生産している。もし、そうでなければ、資本家は、生産物の分配をめぐって、人格的な支配をしなければならなかったであろう。

双方の相違はどこにあるだろうか。貨幣生成の共同行為が、商品所有者による生産物への価値づけという行為の裏面であったのに対し、労働者の場合の剰余労働の支出は、資本の生産過程での労働という一つの過程の時間的延長としてある。もちろん、物象化にもとづく物神性によって、賃金は労働の価格として現象し、全ての労働時間が支払われた労働として現象する。とはいえ、労働力を長時間可変資本に物象化させたままにしておくためには、職場規律が必要とされる。

こうして、資本は意志の力で廃絶できるかどうかを判定する条件が整えられた。貨幣の資本への転化は労働力の売買に始まる。この過程は、単なる商品の売買とは異なって、商品所有者たる労働者が、資本の生産過程で可

変資本に物象化され、剰余労働を支出させられるシステムである。このシステムのなかで、労働者は意識せずに資本を生産しているとはいえ、労働者にとってはこのシステム自体が一つの強制された過程として意識されている。

労働者階級の階級意識が、資本家階級と労働者階級との間の利害の非和解性を理解していた時代に、帝国主義戦争に敗北したロシアで資本家階級を収奪することをめざしたプロレタリア革命が勝利したが、この事実は、意志の力で資本を廃絶しえることの例証となる。

ロシア革命の場合、生産手段の私的所有の廃止が目標であり、この目標に従って資本家の私有物であった生産手段が国有化されたことにより、私的資本家階級は一掃され、私的資本は廃止された。この延長上に、商品・貨幣を廃止することも目指されたが、それは成功しなかった。ここにロシア革命の本当の困難がかくされていた。そうだとするならば、商品・貨幣を廃絶に導けるような道すじをもった資本の廃絶の仕方が問われていることになる。

2. 労働者階級の成熟

今日、労働者階級の階級意識は成熟し、市民意識をもつに到っている。このことは何を意味しているだろうか。

労働者階級の階級意識が、資本家階級と労働者階級との階級的利害の非和解性の認識というレベルの内容であった時代には、階級闘争は、敵階級に対する憎悪を組織することでもって闘われた。次の社会システムをどのように組織するか、といったことは、政治権力を奪取してから考えればよいことであった。

ロシア革命以降、先進諸国ではプロレタリアート独裁の樹立の試みはことごとく失敗し

た。この意味では労働者階級の階級闘争は敗北したが、これとひきかえに、彼らは体制内での現世的力を増大させてきた。資本の生産過程での資本への隷属には変化はなく、従って、労働者階級の資本家階級への経済的隷属はいぜんとして続いているものの、労働者階級の政治的、社会的地位は向上し、この分野では、資本家階級と事実上の同権者となった。こうした事態は多国籍企業と国際金融システムによる第三世界の経済的搾取と収奪によってのみ現実化しえたものであり、先進諸国の労働者階級の市民階級化の裏面には、第三世界人民の窮乏化と国民経済の疲弊とがあった。従って、伝統的な左翼の政治的手法は、第三世界人民との連帯を呼びかけることを通して、労働者階級に伝統的な階級意識に目覚めさせる、というものであるが、これでは今日の労働者階級の市民意識を批判することができなかった。労働者階級が成熟して、市民意識をもつようになったとき、市民社会批判にもとづく市民意識批判こそが問われていたのである。

3. 市民意識批判の形成

労働者階級の市民意識への批判は、伝統的な左翼の潮流とは別のところからやってきた。それは、今日の資本主義的工業生産が、地球の生態系の再生産を不能にする規模にまで到達したことにもとづいていた。エコロジー、カウンターカルチャー、新しい社会運動、反原発運動、など、運動は多様であるが、その特徴は、今日の市民社会を批判し、次の社会システムを設計し、提示しようとしているところにある。

伝統的左翼は、マルクス、エンゲルスが展開した、空想的社会主義批判の立場をかたくなに守り、次の社会システムの設計や提示については信を置かず、冷笑してきた。しか

し、マルクス、エンゲルスの批判は、まず政治権力を奪取する、という当時の階級闘争の大道をふまえてのものであり、この路線が、商品・貨幣を廃絶しうることを展望したうえでの資本の廃絶をもたらすはしなかったことが判明した現時点では、マルクス、エンゲルスの言葉を繰り返してよしとするわけにはいかない。

また、新しい社会運動は、ベルンシュタイン主義や構造改革路線と同じものだとみなされがちである。しかし、後者は市民社会を理想化し、現体制内部での民主主義的改良を積み重ねることにもとづいて社会を変革しようとしているのに対し、前者が運動の民主主義的性格を超えて市民社会批判を展開している点で、根本的に異なっている。

とはいえ、市民社会批判は一筋縄でいけるようなものではない。市民社会の原理は商品にあり、物象化の原理にあったとすれば、そこには物象に意志支配された世界がある。次の社会システムについて理性的に考察し、プランを提示してみても、それを実現するための手がかりをつかむことができないのである。

4. 資本における物象化の廃絶

市民社会の原理が商品にあり、その根本が物象化にあるとすれば、市民社会批判は物象化批判としてなされねばならず、物象化しない社会システムへの移行を実践的に提起するものでなければならない。

商品における物象化が、貨幣生成の共同行為という意志では手に負えない領域でなされているとしても、資本における物象化の方は、社会的強制によって与えられねばならないことを見てきた。そうだとすると、資本の廃絶を、資本における物象化の廃止を目標に実践することによって、商品・貨幣における物象

化の廃止へとつながりをつける道がひらけてくる。

資本家階級を収奪することによって、資本を廃止する試みが、商品・貨幣における物象化の廃止へとつながらなかったのは、前者は政治的行為であり、意志の領域に属している、それをいくら延長しても、商品・貨幣の物象化には手が届かなかったからであった。ところが、資本の廃絶をめざした運動の目標を、資本における物象化の廃止というところにおくならば、それはおのずから、政治の領域をはみだし、運動は経済社会を包摂して、結局は文化の領域へと浸透していかざるをえない。

ライフスタイルの変革ということが語られてきており、それは非常に多様な意味に使われているが、根本的に重要なことは、もう一つの働き方であり、資本における物象化の廃止の展望をつくりだすことであることが、ここに明らかとなった。

5. 社会化された資本の段階における資本の止揚の展望

レーニンが、帝国主義を資本主義の最高の発展段階とみなしたが、帝国主義諸国におけるプロレタリア革命の敗北によって、資本主義は新たな段階に入った。従来、この段階は国家独占資本主義と見られていたが、国家独占が強化されたのは一時期のことにはすぎず、多国籍企業の発達と国際金融市場の完成によって見えて来た新しい時代区分は、社会化された資本の段階と特徴づけられよう。

ロシア革命以降、帝国主義諸国の資本は、発達し成熟しつつあった労働者階級の運動に直面して、その資本制的外被を社会化させずには延命できなかった。資本の社会化として意義をもつ株式会社が資本家的企業の主要な形態となり、貨幣制度は、金本位制から不換

制へと移行して、金融市場の社会化をおし進めた。もちろん、この社会化は、形式のうえでのことであり、現代の独占企業を支配している者はひと握りの金融資本家であることに変わりはない。

しかし、形式のうえでの社会化は、その形式を利用して、資本の止揚を実現する展望を明示しうる。今日、株式会社よりもより社会化された企業のイメージが語られるようになってきている。より一層の社会化とは、生産過程における物象化に手をつけずには進まないであろう。株式会社の協同組合への改組、といった問題が語られるようになり、資本の止揚が実践上のものとなってきたのである。

C. 協同組合資本の実践論

1. 協同組合の株式会社への移行の原因

当初協同組合として出発した企業が、運営のゆきづまりにより株式会社に移行した例は多い。消費生協の源流であるロッヂディール先駆者組合も実は、繊維工場の協同組合をもっていた。ところが、消費生協の成功と裏腹に、生産協同組合の方は、資金に行き詰まり、株式会社化している。

労働者生産協同組合が長続きしない理由として、他の資本家的経営にまけないだけの、積極的投資を行える資力にめぐまれていないことがあげられる。利益をあげた時に、それを蓄積することに重きをおかず、組合員の間でわけてしまうというわけである。

別稿で見るように、モンドラゴンは、この蓄積の問題を解決している。このモンドラゴンの経験をそのまま他の諸国の労働者生産協同組合に活かすことができるだろうか。会計上の原則をそのまま機械的に適用しても決して成功しないであろう。モンドラゴンの場合、アリスメンディアリエタによって提起さ

れた協同組合思想があり、それは冒頭で引用しておいた、「労働の優越性」と「資本の道具的従属性格」というモンドラゴン協同組合原則としてまとめられている。彼らは、バスク地方で、まだ資本のシステムが整備されていなかった1956年から活動をはじめ成功を収めたのである。

すでに全面的に発達した資本のシステムの真っ直中で、モンドラゴン協同組合原則をそのまま利用しようとしても恐らく失失を買うだけであろう。とはいえ、すでに見たように、今日の資本は発達し過ぎてそのピークを超えてしまっている。他方、労働者階級も、市民意識に基づく参加意識をもち、もう一つの働き方を求めている。ここにモンドラゴンの経験を活かし、その原則を別の道をたどって実現する可能性が開けているのではなからうか。

協同組合の株式会社化の原因は、直接的には投資資金不足の問題であり、それは組合員のエゴの問題であると捉えられがちであるが、根底的には、社会の変革の展望をもちえたかどうか、という問題であろう。モンドラゴンの場合も日常生活のうちに社会変革の展望をもちえていたが故に、組合員は積極的に、資本を蓄積したのである。

従って、今日労働者生産協同組合を設立しようとするならば、まずもってもう一つの働き方が、社会変革の展望を担っていることを明らかにすることが要求されてくる。

2. 資本はやはり資本か

その際、協同組合資本といえども、今日の社会では、通常資本としてしか機能しえない、という見解の正否を検討しておく必要がある。

協同組合の株式会社化の例や、協同組合としての活動を展開できていないような名称だ

けの協同組合の場合に見られるように、その資本が通常資本としてしか機能していないケースは多々見られる。つまり、理想を失った協同組合の資本は、糸の切れた凧のように風に流されるしかなく、従って諸資本の競争にもとづく外圧をまともに受けて、自らを通常資本として機能させる他に延命することができなくなるからである。

生産協同組合を例に引けば端的であるが、組合員が生産現場での労働を社会変革の事業として捉えられず、従って、自らの労働力を資本に物象化させてしまえば、協同組合資本といえども通常資本に転化してしまう。従ってさきのテーゼは、協同組合運動の敗北の帰結なのである。

3. 「もう一つの働き方」の意味

自らの労働力を物象化しない、という提言は理解するのに骨が折れる。しかし、今日では、この思想内容が「もう一つの働き方」という、わかりやすい言葉で表現されている。ここに、労働者生産協同組合の無限の可能性が見いだせる。

問題は、「もう一つの働き方」がほしい、という大衆的な欲求に応えられるシステムを形成することと、この働き方自体が社会変革の展望をつくりだす運動であることを明るみに出すことである。

労働者生産者協同組合については、すでに、全日自労から出発した中高年雇用事業団がその取り組みを開始し、各方面に影響を与えている。また、一部の消費協同組合も、「もう一つの働き方」を実現させている。

こうした事態の大局を見極めるとすれば、商品と市場経済がまだその矛盾を深刻化していない時期に資本の矛盾が早熟し、政治権力の奪取にもとづく資本の収奪が社会変革の展望として現実的なものとなった過去と比べ、

今日、資本が社会化され、その矛盾を見えなくしたとき、商品と市場経済の矛盾が深刻化し、市民社会批判が深化してきた、ということであろう。

従って、今日の資本への批判、「もう一つの働き方」は、実は、商品と市場経済の矛盾に目覚めることを前提にしている。「もう一つの働き方」から出発して形成する資本の止揚の試みが、商品・貨幣の廃絶へと連動していかざるをえない根拠がここにある。この見地からの協同組合的社会的構想がいま問われている。

モンドラゴン協同組合群紹介

安藤一夫

1. 数字に見る成長の跡

モンドラゴン協同組合群については末尾に示してあるように、多くの文献がある。ここでは、その急成長の過程を一瞥し、その成功の秘密がどこにあるかをさぐってみたい。まず、最初の出発点であった、1956年の時点からの生産協同組合の組合員数を示そう(表I)。この23年間に、協同組合の数は70になり、全工業協同組合の組合員は15,672人を

数えるに到っている。

また、販売高を見ると1979年には工業協同組合全体で時価で500億ペセタ(1ペセタ約1円)に達し、1970年から79年にかけて、年平均8.5%(1975年を除く)の成長をとげている(表II)。

さらに、協同組合群の中核にある労働人民金庫(CLP)の資産も増大する一方である(表III)。

なお、1976年から83年をカバーした、別種の統計資料もあるので、それも掲載しておこう(表IV)。

表 I モンドラゴンの工業協同組合における雇用

年次	ウルゴールの雇用	ウラルコ事業体の雇用	22の協同組合における雇用	全工業協同組合における雇用	協同組合事業体の数	ギブスコアの工業協同組合における雇用	協同組合の雇用(6)がギブスコアの全工業雇用に占める百分比
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
1956	24	24					
1957	47	47					
1958	143	170					
1959	178	215					
1960	228	265		395	8		
1961	316	358		520	12		
1962	429	498		807	16		
1963	600	904		1,780	24		
1964	816	1,350		2,620	27		
1965	858	1,643	3,178(22)	3,395	30		
1966	940	1,931		4,202	31		
1967	1,000	2,253		5,082	37		
1968	1,800	3,301		6,418	38		
1969	2,030	4,038		7,703	40		
1970	2,400	4,131		8,570	40		
1971	2,945	4,700	7,227	9,423	43		
1972	3,406	5,400	7,968	10,329	44		
1973	3,243	5,700	8,198	11,141	45	9,862	7.7
1974	3,284	5,900	8,785	12,063	46	10,604	8.3
1975	3,191	5,800	8,970	12,543	50	10,897	8.3
1976	3,460	6,300	9,640	13,493	57	11,702	9.8
1977	—	—	—	14,517	61	12,615	11.3
1978	3,599	6,550	9,983	14,676	66	12,753	11.6
1979	3,855	6,680	10,780(22)	15,672	70	13,618	12.5

注：1) 1978年12月には、16022人の組合員が72協同組合(農業3の213人、エロススキの554人、サービス協同組合2の579人を含めて)にいた。工業協同組合以外の協同組合のデータはⅦ章で吟味される。
2) 1979年の数値はCLPが同年の5月に行った見直し。

表 II 協同組合の販売(1956-79)

年	ウラルコ の販売高 (時価) (1) (百万ペセタ)	モンドラ ゴンの工 業協同組 合の販売 高(時価) (2) (百万ペセタ)	モンドラゴン 協同組合全 体の販売高 (1971年以 降は時価) (3) (百万ペセタ)	モンドラゴン 協同組合 全体の販売 (固定-1976 年-価格) (4a) (百万ペセタ)	実質成長 の指数 (カッコ 内は年成 長率) (4b)	類似部門 の販売に 占める協 同組合の 割合 (5)
1956	0.4	0.4		1.8	0.01	0.004
1957	7.3					
1958	27					
1959	66					
1960	120	200		700	5	0.7
1961	167					
1962	250					
1963	490					
1964	850					
1965	1,100	1,900		5,200	37	3.5
1966	1,600	2,900		6,600	47 (27)	
1967	2,250	3,350		7,300	53 (13)	
1968	2,550	4,000		8,350	60 (13)	
1969	3,850	6,300		13,000	94 (57)	
1970	3,800	7,100		13,900	100 (6)	8.9
1971	4,850	8,100		14,750	106 (6)	8.9
1972	6,100	10,400	10,700	17,600	127 (20)	9.3
1973	6,700	12,600	13,200	19,400	140 (10)	9.0
1974	7,800	16,100	17,700	21,450	154 (10)	9.9
1975	8,300	17,900	19,700	20,600	148(-1)	10.3
1976	10,900	22,500	24,800	22,500	162 (9)	10.6
1977	14,100	30,000	34,100	24,200	174 (7)	—
1978	18,600	38,200	43,570	25,900	186 (7)	—
1979	22,000	50,000	57,245	28,750	207 (11)	—

資料：CLP経営部の内部資料；1968-1979年のCLP年次報告；Anuario Económico y Social de España, 1977: Table 3.1.5, 275, Table 3.7.1, 295; Informe Económico 1976, 123.

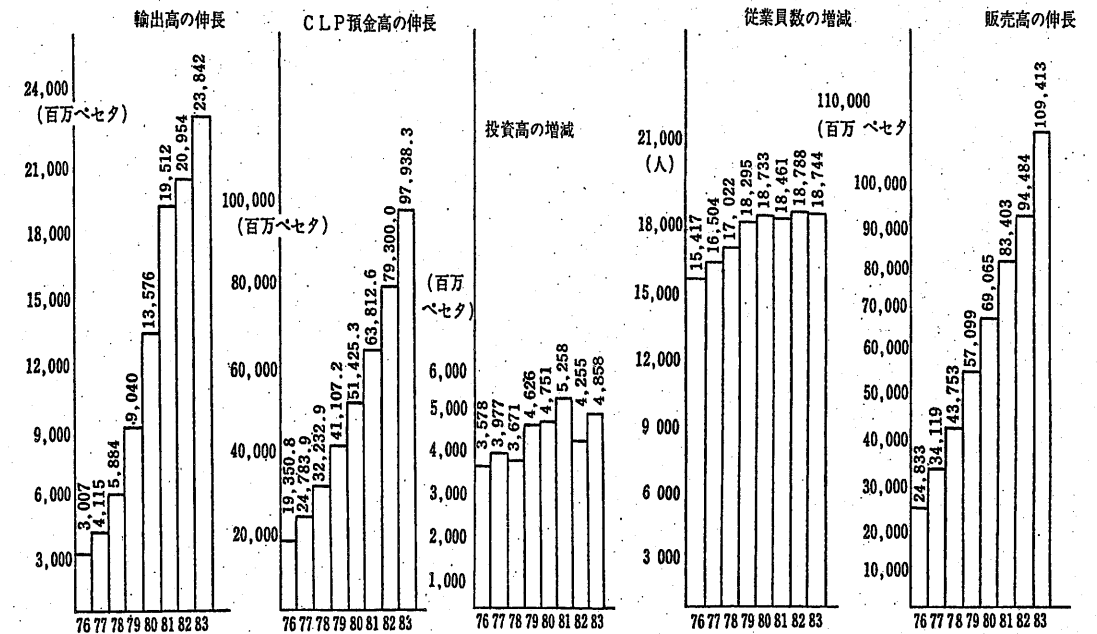
表 III CLPの資産(1968-79)¹⁾

(単位：100万ペセタ)

	現金 (1) (%)	債券 (2) (%)	割引手形 (3) (%)	中長期貸付 (4) (%)	固定資産 (5) (%)
1968	191 (11)	239 (14)	849 (50)	203 (12)	158 (9)
1969	386 (14)	339 (12)	1,290 (47)	301 (11)	239 (9)
1970	465 (12)	615 (16)	1,676 (45)	371 (10)	310 (8)
1971	967 (18)	1,046 (20)	1,714 (32)	1,038 (19)	372 (7)
1972	1,277 (18)	1,557 (21)	2,201 (30)	1,416 (19)	524 (7)
1973	1,697 (18)	2,476 (26)	2,653 (28)	1,751 (18)	671 (7)
1974	2,468 (19)	2,465 (19)	4,097 (32)	2,548 (20)	1,067 (8)
1975	2,694 (16)	3,385 (20)	4,926 (29)	4,078 (24)	1,332 (8)
1976	2,791 (12)	4,811 (21)	6,881 (30)	5,814 (26)	1,598 (7)
1977	3,567 (12)	5,997 (21)	8,046 (28)	8,093 (28)	2,089 (7)
1978	4,753 (13)	7,695 (21)	10,029 (27)	10,896 (29)	2,554 (7)
1979	5,520 (12)	9,399 (20)	12,864 (28)	14,787 (32)	3,587 (8)

注：1) パーセントは対総資産に対する割合(表IV-5の第5列)
資料：「CLP年次報告。」1968-1979年。

表 IV



2. その特色

労働者協同組合で、モンドラゴンのような巨大な規模に成長した例はかつてなかった。農業協同組合や、消費生協は発展の可能性があるが、労働者生産協同組合はそうではない、というのが協同組合研究者のなかでは通説となっていた。ところがモンドラゴンではその通説がくつがえされたのである。

1980年、モスクワで開かれたICA（国際協同組合同盟）第27回世界大会で、レイドロウ氏がモンドラゴンの経験を評価し、労働者生産協同組合を、協同組合運動が重視しなければならない四つの優先分野の一つとしたことによって、モンドラゴンは世界中の協同組合活動家から注目されるようになった。その後多くの文献が発表され、モンドラゴン協同組合群の形成過程が明らかにされてきたが、そこには非常に特色のある足跡が見られる。

ここでは創始者アリスメンディアリエタ神

父の協同組合思想、協同組合員の教育、協同組合の信用機関としての労働人民金庫（CLP）の3点にわたって紹介しよう。

3. アリスメンディアリエタの思想

バスク地方の労働運動は、第一インターナショナル時代以来の伝統をほこっている。第一インターナショナルビルバオ地区連合体には、1882年までには、7支部525人のメンバーを数えるにいたっていた。

1916年スペイン国会で初議席を占めたバスク民族主義者党は、次の綱領を発表した。

- 「1. バスク労働者の組織がある町では、それぞれ生活協同組合を設立する。
- 2. 生活協同組合のバスク地方連合体を設立し、相当量の商品を協同購入して必要経費を節減する。
- 3. 各単協および連合体に必要ないっさいの金融業務を提供するため、信用協同組合を設立する。

4. 信用協同組合内に貯蓄金庫を設立し、少額預金を集めて管理する。

5. 工業・農業・漁業の各生産者協同組合を設立し、生活協同組合地方連合体との間にそれぞれ適切な関係を築き上げて、中間業者を除いた生産者および消費者の協同組合の経済として結実させる。」(文献1、26頁)

早くも1921年には、ビルバオのELA-STV本部で産業学校が開設され、協同組合工場と並んで各種の生活協同組合も設立されたが、このうち、ギブスコア州のエイバルに設立された協同組合工場アルファは、広くその名を知られていたという(文献1、27頁)。

アリスメンディアリエタは、1915年4月、エイバルを市場町とするマルキーナの農家に生まれた。もの心ついた頃に協同組合工場アルファが設立され、1930年代には200人の労働者が働く企業に成長していた。1941年にモンドラゴンに神父としてやってきた彼が、最初から一定の協同組合思想と具体的プログラムをもった見識ある活動家としてあらわれることができたのは、このバスク地方の歴史的経過による大きい。

彼の協同組合思想については、ホセ・アスルメンディ『アリスメンディアリエタの思想』が翻訳されていて、その参照が不可欠であるが、いま手元にこの本がないので、本格的には別の機会に論じるとし、ここでは石塚秀雄の論文から、その概略を紹介するにとどめておこう。

まず、労働概念について。

「アリスメンディアリエタは、労働の概念について真面目に考察を加えた協同組合主義者の一人である。マルクスの『資本論』の中の「イギリス工場法における教育」を引用して、教育と労働を一緒に行うことが将来の教育の在り方であると主張した。労働者の開放は労働者の人間としての尊厳の獲得であり、

労働による解放であり、労働者による人間の自己実現である。そのための教育もまた自主財政により自主管理によらなければならない。また、文化の社会化、知の社会化こそが労働者が権力の民主化を勝ち取る道であり、文化のブルジョア的独占を阻む道であると主張した。

アリスメンディアリエタの労働概念は、きわめてキリスト教的なものを含んでおり、労働とは仁愛であり創造者であり、神との協同であった。労働は本来的に責苦ではなく、神と人間との信頼の確証であると述べている。人格に関して、アリスメンディアリエタは「労働のみが人間の性格を変える」ものだと考え、不変の人格性を信じなかった。「労働は人間化の要素であり、労働の社会化の中で人間を改革するものである」と言っている。アリスメンディアリエタは所有概念を常に労働の義務と結びつけていた。

アリスメンディアリエタの優れたところは、労働者階級は自己を管理し自由な人間的活動を行うために、教育を通じて十分成熟した状態になり得るのだと考え、参加がその保障であると考えた点である。多くのその他の労働者生産協同組合主義者と彼の異なる点は、資本主義における分業による疎外の危険を認識する一方で、労働の分割による積極的側面、すなわち、分業により労働共同体の絆、効率、進歩、連帯が生まれ、労働の創造的性格により個人の労働が共同体の創造的主体となると考えた点である。そして、連帯に関しては、職人的手工業や友愛についてのノスタルジーをセンチメンタルなものとして排除して、工業・大工業への生産の移行を主張した。手作業機械が封建領主の社会をもたらした、蒸気機関が資本主義社会をもたらしたというマルクスの言葉を受けて、アリスメンディアリエタは技術発展と社会組織形態との関

連を明確に意識していた。彼の考えは、労働者が生産財を所有することが必要であるということであった。」(文献2、33~34頁)
次に協同組合思想について。

「過去の生産協同組合が何故失敗したのかという点について、アリスメンディアリエタは、それは管理・モラルについて考え抜かれておらず、物質的・構造的支えが十分でない安易なヒューマンイズムの誘惑に陥ったからだと言っている。彼は、協同組合企業存続のための資本化に注目し、技術者や専門家を協同組合に定着させるための優遇措置の必要を主張した。後期産業時代・技術時代の現代においては、労働者は自らを市民階級として理解しており、労働者の闘争は物取りの要請ではなくて参加である。「今日の革命は参加という名前である」とアリスメンディアリエタは言っている。

アリスメンディアリエタの協同の原則の基礎には、次のものがあげられる。①キリスト教理念。②人格主義的人間の概念。③技術学校設立時の経験。④現代世界についての危機意識。⑤マルクス主義的労働概念(自然・素材変換による人間の自己実現としての労働)。⑥技術の発展と社会化の肯定的評価。⑦労働者の意識の発展についての肯定的評価。

アリスメンディアリエタは連帯を主張したが、これは単に共生感を味わうものでも安易な道徳でもなかった。連帯は人々の協同と連合のために自己犠牲を要求するものであった。具体的には、利益追求社会の中で、生産性や利潤・賃金配分において全体のために寄与することである。協同組合における労働者のモラルと可能性への信頼、経済発展・社会進歩の担い手としての労働者の成熟への確信、享受を待つのではなく、根本的に与える側に変わるための経済的文化的活動の重要性

が連帯の目標であった。労働の機会均等、文化の機会均等、健康的な生活の機会均等について、それぞれ工業協同組合、教育文化連盟、社会保障協同組合がその担い手として位置づけられたのである。

協同組合設立にあたって、アリスメンディアリエタが条件として想定したのは、①グループの基本的技術能力。②どの分野を労働対象として選択するのか。③法的な保障制度であった。第二点については、協同組合が向かない分野として、いわゆる基幹産業、さらには職人労働分野で、これは狭い枠での教育しか可能でないとし、加工・製造業が向いていると考えた。また、生産協同組合の規模については、大量生産工程が不可避と考えていた。生産協同組合は小さく狭い範囲でのみ可能だと考えられがちだが、大量生産システムこそが生産者の高水準な獲得を可能にすると彼は言っている。しかし、技術だけでは労働における参加と人間化を獲得することはできない。ここに彼にとって、人間中心の協同組合の社会的性格が強調されなければならない理由がある。」(文献2、34~35頁)

最後に、そのリアリズムにもとづいた協同組合論を見てみよう。

「協同組合の陥り易い危険として、彼は次の点をあげている。

①管理能力のある人間の欠如している協同組合。②労働の科学的組織的法則に挑戦できない協同組合。③単なる熱意を、資本や技術や先見性の適切な処理と取り違えている協同組合。④労働の適切なプログラムのない、また安易で性急な事業の幻想を抱いている協同組合。⑤連帯意識のない協同組合。

アリスメンディアリエタは、労働者と企業家であるという二つの資格は、本来、精神と肉体のように不可分に結びついているとして、指揮と協同、実践と管理は同一の人物の

中で結合されていなければならないといっている。彼は、労働者が企業家であるために必要な特性として、危険に対応する能力、再投資意欲、決断力を挙げた。勿論、これは孤立した個人の特性としてではなく、企業共同体の一員としての労働者企業家の特性である。

管理についても管理労働として位置づけ、強力な自治と実行に際しての絶対的独立性、権限の代表性、情報の上下の相互伝達・公開、さらに官僚主義を避けるための管理者の定期的交代を提案している。交代は専門化と効率の原則と衝突するが、しかし、彼は解決可能と見ていた。効率とヒューマンイズムという矛盾する要素の解決に取り組まなければならないと考えた点が彼の優れた点である。」(文献2、35頁)

このような協同組合思想が、同時代の他の思想家と比べてどの程度の創造性をもっていたかを明らかにすることは、今後の課題である。また、ここでの石塚の紹介も、思想の展開を年をおってたどったものではないので、実際に協同組合が軌道に乗ったあとでのその実践の総括も含まれているようである。

とまれ、フランコ独裁下のバスク地方は、中央政府の力のおよびにくい、ある種の2重権力状態があり、そのような政治的力関係を背景に、このような協同組合思想が、根づいていったのであろう。

疑いもなく、この成功は特殊例であるが、この特殊例のうちに今日の協同組合運動に活かすべき普遍的な指針を発見することが問われている。

4. 教育

「生産者協同組合の第1号が1956年にスタートする13年も前から、教育事業は続けられていた」(文献1、78頁)。

1941年にモンドラゴンに神父として着任し

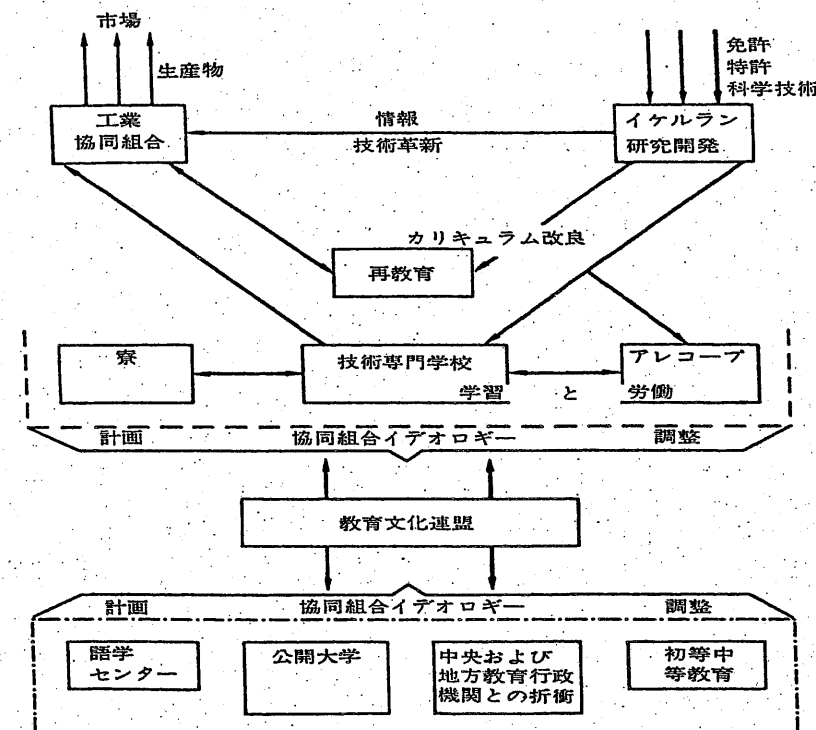
たアリスメンディアリエタがまず手がけたのが技術教育であった。彼ははじめは民間企業の徒弟学校を拡大することを提案したが拒否され、独立した技術訓練学校を設立することを決意し、住民に呼びかけた。

住民の支持により、学校は1943年、20人の新生入生でスターとした。47年には卒業生が、資格試験に合格し、そのうち11人の学生はモンドラゴンで働きながら、夜間はサラゴサ工科大学に通うようになる。52年に彼らは学校を卒業し、それぞれ工場現場で責任ある部局について。11人のうち、5人の卒業生は、アリスメンディアリエタの「労働の優越」の思想を實踐すべく、自らの仕事場を開設することをめざす。

彼らはとりあえず有限会社ウルゴールを設立し、1954年にビクトリアで売りに出された小企業を買収した。そこで助走を試みた後、1956年にモンドラゴンで新工場を建設し、実質的に協同組合化を実現したのであった。

このように、モンドラゴン協同組合群の出発点となったウルゴール協同組合の創始者達が実は技術学校の出身者たちであったのである。モンドラゴンと教育との結びつきはこれに終わるものではない。早くも1948年には、教育文化連盟が結成され、以降、多様な教育活動が展開されてきた。

図解 モンドラゴンにおける協同組合教育



図解の中央に位置している技術専門学校は1943年に出発した技術学校で、76年には教育省から工科大学として認可され、78年の時点では生徒数千人を越える規模にまで発展してきている。

アレコープは、1966年に学習と労働とを結びつけるべく設立されたもので、技術専門学校の学生の労働研修の場であった。当初その計画の現実性が疑われ、数年間赤字であったが、70年に学校から独立した協同組合化に成功するほどの業績をあげられるようになり、72年以降は黒字を記録している。アレコープの成功は、技術専門学校の技術教育の水準をひきあげることもつながった。こうして、学生による生産協同組合アレコープは、モンドラゴン協同組合群の一つの重要な特徴として数えあげられるようになった。

イケルランは1977年に設立された研究開発センターである。2億ペセタの先行投資によ

り、30を超える協同組合の連携によって発足したイケルランは急速に強力なセンターへと成長した。

1948年に結成された教育文化連盟は、当初は技術学校の応援部隊であったが、60年代末からは独自活動に取り組み、70年代末には、保育園3、小学校及び前期中学校3、後期中学校及び大学予備校2、各種レベルにまたがる技術学校5を監督するシンクタンクへと成長している。

この他技術専門学校は寮を教育機関として位置づけ、協同組合化しており、他に生涯教育科をもうけている。

また、1984年には、幹部研修センター、イスカビダが設立され世代交代にそなえている。

5. 労働人民金庫

労働人民金庫 (CLP) は協同組合を会員とす

る第二次協同組合である。各単位協同組合は、スペイン社会において資金の借入れや社会保障などについて、法律的に認められてはいなかった。そこで、自分たち自身の援助機関を設立する必要があった。

早くも1949年7月には、中央政府によってその定款が承認され、翌年には営業を開始したCLPの役割は、連携している協同組合の求めに応じて追加投資をまかない、経営に必要な高度な専門知識を供給することであった。

「労働人民金庫が1960年に活動を始めたとき、その従業員は2名であった。その後の四半世紀で労働人民金庫はスペインでもっとも収益率の良い貯蓄銀行の一つに成長し、モンドラゴン複合体を強化する中心適役割りを果たしてきた。労働人民金庫と個別協同組合との関係はいまでも非常に強く、金庫が各協同組合の諸規定を決定し、また各協同組合の発展を導いている。」(文献3、84頁)

理事会は12名で構成され、8名は各協同組合の代表、4名はCLPの代表である。このように、理事会を支配しているのは借り手の企業の側である。民間の商業銀行であれば、このような事態はありえない。ところがモンドラゴンの場合、CLPが各協同組合に対して、単に貸し付けし、貨幣取扱い業務を引き受けるだけでなく、連合契約によって経営指導も行っているがゆえに、このような理事の構成が必要となっているのである。

連合契約の条項の主なもの約をあげよう。

「各協同組合の組合員の民主的権利は、連合契約によって規定された諸基準及び諸機構の範囲内で実行されなければならない。・・・

連合契約は、連合した各協同組合が金庫の資本に対して当初の分担金の支払をすることと、各協同組合がそのすべての銀行業務を金庫にまかすことを要求する。金庫は、連合し

た各協同組合に対して4年ごとに監査を実施する権利をもつ。・・・

協同組合は、性別や政治的または宗教的信条によって雇用を差別してはならない。・・・各協同組合は、一組合員一票を基礎にした民主的統括制度を定めなければならないし、その定款と内規において、ウルゴールによって最初に創出された制度機構を整備しなければならない。

協同組合に加入するためには、組合員は出資金を支払い、また加入金を支払わなければならない。・・・

連合契約はまた、社会事業計画、準備積立金、組合員の利益配当に向けられる収益の分配についても、従うべき政策の概要を定めている。・・・」(文献3、86～87頁)

他にも細かく定められているが省略しよう。

次に協同組合企業の資本蓄積についての概略を述べよう。

出資金は個人資本会計(組合員分)と集団資本会計(協同組合積立金)とに振り分ける(85:15)。利子配当は年6%に固定し、個人資本会計分のみ行われる。

剰余金配分は、剰余金が組合員の総所得の50%未満の場合、剰余金の70%までを個人資本会計に、30%以上を集団資本会計に配分する。集団資本繰り入れのなかには剰余金総額の10%以上が地域の社会基金にあてられる。剰余金が50%を超えたときは、次の算式で個人資本会計と集団資本会計とに配分される。

$$\alpha = Z / (Y + Z)$$

α : 集団積立金と社会基金に配分される純剰余金の割合(集団資本の割合)

Y : 純剰余金

Z : 支払給与総額と自己資金に対する利子支払の合計額(組合員の総所得)

この算式によれば、剰余金が多ければ個人資本会計に繰り入れられる割合は低くなり、集団資本への配分率がより高くなる。

個人資本会計は勝手に引き出すことはできない。退職時まで現金化できない。

集団資本は内部積立金であり共同財産である。その構成は内部留保と社会基金である。(以上は文献5、97～98頁による)

(後記)

とりあえず走り書きですがモンドラゴンの特徴をまとめてみました。アリスメンディアリエタの思想についてもっと詳しく分析したうえで、再度展開したいと考えています。

モンドラゴン文献

1. ヘンク・トマス、クリス・ローガン『モンドラゴン』 御茶水書房
2. 石塚秀雄「モンドラゴンの協同組合思想」『仕事の発見』第13号 協同総合研究所
3. ウィリアム・ホワイト、キャサリン・ホワイト『モンドラゴンの創始と展開』 日本経済評論社
4. ホセ・アスルメンディア『アリスメンディアリエタの協同組合哲学』 みんけん出版
5. 堀越芳昭『協同組合資本学説の研究』 日本経済評論社

(注) 詳細な文献目録は、1及び3の訳者あとがきにある。

